

"I Had Rather Had Eleven Die Nobly for their Country"

——*Coriolanus* についての研究——

村上世津子*

(平成14年10月31日 受理)

"I Had Rather Had Eleven Die Nobly for their Country": A Study of *Coriolanus*

Setsuko Murakami*

The crucial issue of *Coriolanus* is whether Coriolanus is the "flower of warriors" or the "chief enemy to the people." Whichever side you may take, you cannot deny that the climax of this play is the moment when Coriolanus yields to his mother in the pleading scene and that the relationship between Coriolanus and his mother is a crucial issue in understanding *Coriolanus*. Volumnia had long been thought to be an ideal mother. However, she has most often been regarded as a "repulsive mother." Many critics think that the plot of *Coriolanus* is a matricide. They say that the protagonist attacks Rome which he identifies with his mother in order to become independent of his mother. They also say that he stops attacking Rome when his mother pleads him on her knees, because by his mother's becoming a pleader instead of a commander, there remains no need for him to attack further. However, reconciliation on condition of his destruction is unnatural. It is more logical to think that Coriolanus yields to his mother because hidden love in Volumnia inspires his human nature. Though Volumnia appears a "repulsive mother," she has in fact a deep love for her son.

key words: Coriolanus, Volumnia, Virgilia

はじめに

Coriolanus の批評の争点は Coriolanus が "flower of warriors"¹⁾なのか "Chief enemy to the people"(1. 1. 5-6)なのかに収斂する。しかし、いずれの立場をとるにしても Coriolanus のクライマックスは、主人公が母 Volumnia の嘆願に屈する瞬間であり、主人公と母の関係は *Coriolanus* を考察する上で避けて通れない問題であることは否定できない。この劇の終わりで Rome 中の人々がこぞって Volumnia を "the life of Rome"(5. 5. 1)と賞賛しているが、これが従来 of Volumnia 観であった²⁾。近年は、精神分析批評家を中心に自分が生き延びるためには平気で子供を犠牲にする "unnatural dam"(3. 1. 298)と見なす見解が主流

* 英文学 助教授

である。たとえば Janet Adelman は Volumnia を "the cannibalistic mother who denies food yet feeds on the victories of her sweet son"³⁾だと述べているし、Charles Hofling は "an extremely unfeminine, non-maternal person"⁴⁾だと述べている。そして Rufus Putney は "a most repulsive mother"⁵⁾だと断じ、D. W. Harding は息子を死へ追いやった後で "passes on triumphantly"⁶⁾すると推測している。さらに Harold Bloom は、"Volumnia hardly bears discussion, once we have seen that she would be at home wearing armor in *The Iliad*"⁷⁾と断じている。ただし、Volumnia の中に女丈夫の側面を見出すだけでなく弱さや悲しみを認める見方も少数ながら存在する。たとえば Christina Luckyj⁸⁾や New Penguin の編者⁹⁾は息子の追放の経験を通して成長しているので5幕3場の嘆願の場面に登場する Volumnia は1幕3場に登場する女丈夫の Volumnia とは異なることを指摘している。Oxford の編者である Parker は一步踏み込んで Volumnia の運命も悲劇的である可能性にまで言及している¹⁰⁾。批評の動向は上演史にも反映されており、Oxford の introduction によれば1954年の Old Vic での上演や Ontario 州 Stratford での上演(1961, 1981)や1972年の RSC による上演では5幕5場の Volumnia の凱旋は夜陰で松明に照らされて行われており、黒い衣装を身につけた女性たちが厳しい顔つきで涙を浮かべながら家路を急いでいるが、1977年や1989年の RSC の上演に見られるように Volumnia の女丈夫の側面を前面に出す解釈は依然主流を為している¹¹⁾。しかし Volumnia に humanity が欠如しているなら何故この劇の終わりで Coriolanus は他の人の嘆願は退けられるのに Volumnia の嘆願に屈するのだろうか。Volumnia は本当に大多数の批評家が解釈するようにおぞましき母の権化なのだろうか。本稿では Volumnia に焦点を合わせて *Coriolanus* を考察したい。

I

Shakespeare の劇には概して母親が存在せず、父と子の関係が前面に出てくるのに対して *Coriolanus* には父が存在せず、母と子の関係が前面に出ているという点でこの劇は特異である。父親が不在なので Volumnia は父の役も果たし息子を危険な戦場に送る。そのこと自体は問題ではないがその送り方が問題である。つまり、Volumnia は父親の役割も兼ね備えた母親と言うよりも母性を捨てて父親以上に父親になっているように思えるところが問題なのである。十分に成長して戦地に赴くのが当然と見なされる年頃になったときに愛する息子をいつまでも自分の庇護の元に置いておきたいという強い衝動にも関わらず、しきたりに逆らうことができないから後ろ髪を引かれる思いをしながら息子を戦地に送ったのではなく、彼女自身が息子はまだ "tender-bodied"(1. 3. 5)なので普通の母親なら片時も息子から離れたくないと認めるようなときに荣誉と引き替えに喜んで危険な戦地に赴かせたことが問題である。それどころか荣誉と引き替えなら息子の死も喜ばしいと断言するのである："had I a dozen sons ... I had rather had eleven die nobly for their country than one voluptuously surfeit out of action."(1. 3. 17-20) Volumnia のこの言葉が単なる強がりでないことは、帰還した息子が傷を負っていることを神々に感謝し、彼が受けた傷をあたかも彼が獲得した勲章であるかのように自慢げに数え上げることでわかる："He

received in the repulse of Tarquin seven hurts i' th' body"(2. 1. 124-5);"He had, before his last expedition, twenty-five wounds upon him"(2. 1. 127-8)そして凱旋した息子の労をねぎらって言う Volumnia のセリフ, "I have lived/ To see inherited my very wishes/ And the buildings of *my fancy*"(2. 1. 172-74 強調筆者) は Volumnia が Coriolanus を一個の人格を備えた存在として尊重しているというよりもむしろ彼女の野心を満たすための道具と見なしていることを示唆している。そして Coriolanus 自身は執政官になることに興味を抱いていないし、適任でないことを自覚しているにもかかわらず——"I had rather be their servant in my way/ Than sway with them in theirs"(2. 1. 176-77)——強引に執政官の地位につかせようとするのは先の解釈を支持しているように思える。

人格よりも野心、傷の痛みよりも勲章、そして名誉と引き替えなら死さえ喜ばしきものだと感じる母親に育てられた Coriolanus が勇猛果敢で名誉を重んじる "flower of warriors"である一方で他者——特に勇氣に欠け実利にさとい民衆——の痛みや弱さに対する同情心の欠如した人間になるのも当然のように思われる。ヴォルサイ軍との激しい戦いで Coriolanus 率いるローマ軍が破れて陣内に退いたときの Coriolanus の民衆に対する悪態と叱咤(1. 4. 31-41)はヴォルサイ軍との戦いで退却を余儀なくされたときに Cominius が彼の率いた軍にかけるとねぎらいの言葉(1. 6. 1-9)と対照的である。もし Coriolanus に Cominius のような民衆に対する同情心が備わっていれば、あるいは穀物を自分たちの言い値で手に入れたという民衆たちの要求を胃袋の寓話でかわした Menenius のようにユーモアを身につけていたならば、護民官や民衆との対立、ひいては Coriolanus の追放は避けられたであろう。この点において、Coriolanus の悲劇は民衆対貴族という政治的な対立よりも Coriolanus の性格に起因すると言うことができ、そのような性格の形成に与した Volumnia によって引き起こされた悲劇だと言っても過言ではないだろう。Volumnia は Coriolanus に悲劇の道を歩ませる要因を作っただけではない。より重要なことは Coriolanus を破滅させる最後の引き金を引くのも Volumnia だということである。

故郷から追放された Coriolanus は、かつての仇敵である Aufidius を訪ね彼と組んで Rome に復讐を企てる。Coriolanus を欠く Rome にとって外敵しかも Coriolanus と Aufidius の二大武人率いる軍隊の進入を前にしてはひとたまりもない。Rome 方に残された唯一の道は Coriolanus を懐柔してヴォルサイ軍と講和を結ぶことである。そのために Cominius 将軍自らが Coriolanus の許に赴き、次には Coriolanus が父と仰いだ Menenius が Coriolanus の許を訪れるが、二人の努力は功を奏さない。Coriolanus の心の奥深くに封印されている nature を覚醒させ Coriolanus に翻意させることができるのは家族だけである。しかしそうすることは Rome のためにはなるが Coriolanus を非常に危険な状態にさらすことになる。肉親の情にほだされて Rome と講和条約を結ぶことはヴォルサイ軍が当然手にし得たであろう勝利をフイにすることであり、ヴォルサイ軍を裏切ることを意味するからである。だから Coriolanus は肉親の情にほだされまいと必死で抵抗するが、その試みもむなしく、結局 Volumnia に屈し、予期した通りヴォルサイ方に殺される。他方 Volumnia ら婦人たちは Coriolanus を説得した功績により、Martius を追放した声を打ち消すほどの歓迎の叫びで迎え入れられる。もし Volumnia が Coriolanus の妻子と共に嘆願

に行かなかったなら復讐の鬼と化した Coriolanus は Rome を壊滅させ、ヴォルサイ方に圧倒的な勝利をもたらした功績でヴォルサイ軍の要職に留まり得たかもしれない。息子を破滅させた功績によって名誉を得ることは1幕3場での Virgilia と Volumnia の会話を想起させる。

Virgilia: But had he died in the business, madam, how then?

Volumnia: Then his good report should have been my son. (1. 3. 15-16)

名誉のためには平気で息子を犠牲にする母親を演じきる Volumnia は "repulsive mother" 以外の何者でもない。しかし何故 Coriolanus はそうすることが破滅につながることを自覚しているときでさえも母の言いなりになるのであろうか。年端もいかぬ少年であったときは別として、既に成人し "Flower of warriors" と賞賛されるほどの権威と力を持つ存在となった以上、どこに母の叱責を怖れなくてはならない理由があるのだろうか。次項では Coriolanus が母の支配から逃れられない原因を探っていきいたい。

II

Coriolanus は何故母に支配され続けるのかという問いに対して Sprengnether ら精神分析批評家は、そもそも *Coriolanus* の plot は母親殺しであると考え、Sprengnether によれば、他の悲劇の主人公と同様に Coriolanus は fighting と manhood を同一視する。だから wounds と masculinity を同一視する母の見解を十分に支持することができるが、wounds を見せることは彼の incompleteness を明らかにすることであり、彼が castrated されていることを暗示するからこの恥辱を受け入れることができずに Aufidius を訪ねる。Coriolanus にとって Volumnia は Rome そのものであるから Aufidius と組んで Rome に戦争を仕掛けることは母親殺しの怒りを向けることであり、母からの分離を意味するという趣旨のことを述べている¹²⁾。嘆願の場面では Volumnia 自身が「祖国を攻撃することは母の腹を踏みじること」(5. 3. 123-5)だと断言しているし、これに先立つ場面では嘆願に来た Menenius を追い返すときに Coriolanus は "Wife, mother, child, I know not" (5. 2. 76) と述べて母子の情を断ち切る発言をしている。これらから判断すると Sprengnether の見解は妥当だと思える。問題はこれほどまでに激しい母親殺しを企てながら何故 Coriolanus が土壇場で母親殺しに失敗するのかである。この問いに対して Kahn は次のように考える。すなわち、Macbeth と Coriolanus は共に血なまぐさい武人という点で男らしいが、この男らしさは彼らの背後に存在する女性に依存している。だから彼らの名誉が彼らを新しい領域に導くと新しい環境に適応できなくなり、Coriolanus は彼が鑑であった市に反旗を翻すし、Macbeth は彼が嘆き悲しんでいた鬼畜に成り下がるが、このような tragic reversals は彼らの男らしさの鎧の破れ目を表す。そしてこの破れ目が見せる弱さが彼らの命取りになると考える¹³⁾。これも非常に説得力のある主張であるが、それなら彼らの弱さは何に由来するのであろうか。彼らの manliness が女性たちによって作られ、彼らの憐憫の情は女性たちによって奪われたなら、鎧の破れ目から見せる humanity は女性とは無縁のものな

のだろうか。

Kahn は別の本の中で、貴族階級では妻や娘や姉妹ら女性は一一般的に男性に跪くが母親は progenitor としての権威が与えられているので例外的に跪かない、特に *Coriolanus* の中では母は息子に物理的な存在を与えただけではなく彼を *virtus* に仕立て上げた貢献者である、その母親が息子に跪くことでより一層明白に息子が母に負っている恩を喚起させるから *Coriolanus* は母に屈すると指摘している¹⁴⁾。Hofling も母親を跪かせることで Rome を破壊しなくてはならない必然性が減じたことを認めた上で *Volumnia* と対極的な存在である *Virgilia* が果たす役割を指摘している¹⁵⁾。Murry¹⁶⁾や Williamson¹⁷⁾や Leggatt¹⁸⁾も *Virgilia* の役割に言及している。なるほど、命令者が嘆願者になることは *Coriolanus* が母親殺しをする動機がなくなったことを意味するかもしれないし、*Coriolanus* の背後に存在する女性は *Volumnia* だけではなく、息子の命よりも名誉を重んじる姑の考え方に疑問を投げかけ、物静かな性格にも関わらず、姑の再三の誘いを断り、夫が戦地に赴いている間は無事を祈り、家の敷居をまたがないことを貫き通した妻の *Virgilia* の存在を忘れてはならないことは当然である。しかし、これらの主張を認めてもまだ根本的な疑問が解決されていないことに気づかずにはいられない。たとい支配者から嘆願者に身分を落としたにしても母の嘆願を聞き入れることは *Coriolanus* に破滅をもたらすことであり、彼自身がそのことを自覚しているのである。母の嘆願は嘆願という形をした命令なのである。しかもこの命令は執政官になるために本心を偽って民衆に頭を下げるという以前の命令よりも厳しい命令である。本心を偽って民衆に頭を下げるのがどんなに苦痛を伴うものにせよ、一時の苦痛を我慢さえすれば仮面を振り払い、本心を見せることも可能であるが、今度の命令は遂行すれば後戻りはできないからである。

次にそれまで *Virgilia* によって引き受けられてきた *Coriolanus* の中に潜在する *humanity* が嘆願の場面で一堂に会した家族と対面することにより、表面に浮上するという考え方についてであるが、なるほど *Coriolanus* が最初に目にする家族は妻であるし、彼の頑なな心に訴えかけるべく最初に跪くのも妻であれば、この場面で家族の側からの第一声も *Virgilia* の "My lord and husband!" (5. 3. 37) である。それに対して *Volumnia* が口を開くのは *Coriolanus* と *Virgilia* の間でひとしきり会話がなされた後で *Coriolanus* の挨拶を受けてからである。しかもこの順番は Shakespeare が材源にした Plutarch の順番を改変した所産である¹⁹⁾。 *Virgilia* のこの最初の働きかけを重視するなら、確かに彼女が果たした役割は大きい。しかし *Cominius* 将軍や *Menenius* が嘆願を訪れて以来続いていた *Coriolanus* の中の慈悲心と名誉心の葛藤に決着をつけたのが *Volumnia* の言葉であることは *Coriolanus* の言葉が証明している: "O my mother, mother! O! / You have won a happy victory to Rome; But for your son... Most dangerously you have with him prevailed, / If not most mortal to him." (5. 3. 186-90) 彼が敬愛していた指揮官の *Cominius* や父と呼んでいた *Menenius* の言葉に耳も貸さず、 "best of my flesh" (5. 3. 42) の妻には "Forgive my tyranny" (5. 3. 43) と謝罪の言葉を述べても "but do not say / For that 'Forgive our Romans'" (5. 3. 42-43) と言って嘆願を却下することができたのに *Volumnia* の訴えには抵抗しきれなかったのは *Volumnia* の言葉が他の 3 人よりも、もっと深いレベルで

Coriolanus の慈悲心に訴えかけたからではないか。つまり Volumnia 自身の中に存在する強さの背後にある弱さ——humanity——を喚起させられたからこそ Coriolanus は母の嘆願に屈したと考えられないだろうか。このことは"repulsive mother"の権化という Volumnia 観に修正が求められる可能性があることを示唆していないだろうか。再度 Volumnia 像を検討してみたい。

III

Volumnia がこの劇に最初に登場するのは1幕3場である。ヴォルサイ軍との戦いに出陣している Coriolanus の留守を守る Virgilia にもっと楽しそうな様子を見せるように頼み、次のように語りかける：

When yet he was but tender-bodied and the only son of my womb, when youth with comeliness plucked all gaze his way, when for a day of king's entreaties a mother should not sell him an hour from her beholding, I, considering how honour would become such a person—that it was no better than picture-like to hang by th' wall, if renown made it not stir—was pleased to let him seek danger where he was like to find fame. (1. 3. 4-11.)

Volumnia のこのセリフは母性欠如を表しているように思えるという趣旨のことを先に述べた。しかし、果たしてそう言い切って良いのだろうか。Volumnia は決して子供はうるさいし、家でゴロゴロされると嵩が高くて目障りで家事その他の足手まといになるから戦地にでも送ろうとは考えない。それどころか、このセリフの言葉遣いには息子を不憫に思う母親の愛情がにじみ出ている。まず"tender-bodied"であるが、この言葉は *OED* にのっていない。これは"tender"という語と"body"という語を結びつけて作った Shakespeare の造語である。ただ若さを強調するだけなら"very young"を使うか、あるいは初めて戦場に遣ったときの年齢を言えば充分である。それなのにここで敢えて造語を作ったのは Volumnia が伝えたかったことが単なる年齢以上のものであることを示唆している。*OED* によると主として"tender age"や"tender years"というフレーズでは"tender"は"Having the weakness and delicacy of youth; not strengthened by age or experience; youthful, immature"²⁰⁾ という意味であるが"tender"にはそもそも"Soft or delicate in texture or consistence; yielding easily to force or pressure; fragile; easily broken, divided, compressed, or injured"²¹⁾ という意味がある。つまり"tender"は年端がいかないことよりも「弱さ、もろさ」と結びつきが強い語である。そしてここで"tender"が"years"や"age"とではなく"body"と結びついていることはより一層弱さ、もろさとの結びつきが意識されていることを示唆している。"youth with comeliness plucked all gaze his way"も同様である。美しさで人目を引くというのはむしろ妙齢の女性にふさわしい言葉ではないだろうか。そのような言葉を戦地に赴く我が子に使うことは表面的な強がりと裏腹に Volumnia の心の底には息子を戦地にやりたくないと言う声にならない叫びが隠されているのではな

いか。そして“*When for a day of king's entreaties a mother should not sell him an hour from her beholding*”というセリフは Volumnia の抑圧されている思いをより明白に伝える。そもそも「国王が貸してくれ」と言いに来ると想像すること自体が、親ばかの骨頂であるが、国王が一日貸せと言っているのに対して「一時間でも」嫌だと思ふことは Volumnia の Coriolanus に対する溺愛ぶりを物語っている。

名誉のためなら息子の戦死も厭わないと言う Volumnia のセリフも額面通りには受け取れないことがわかる。まずは Volumnia のこのセリフとこのセリフを書くに当たって Shakespeare が参考にし得た²²⁾ Plutarch の *Moralia* の類似箇所を比較することから検討してみよう。次に引用するのは Plutarch の類似箇所である：

One woman sent forth her sons, five in number, to war, and standing in the outskirts of the city, she awaited anxiously the outcome of the battle. And when someone arrived and, in answer to her inquiry, reported that all her sons had met death, she said, "I did not inquire about that, you vile varlet, but how fares our country?" And when he declared that it was victorious, "Then," she said, I accept gladly also the death of my sons."²³⁾

Another, hearing that her son had been slain fighting bravely in the line of the battle, said, "Yes, he was mine." But learning in regard to her other son that he had played the coward and saved his life, she said, "No, he was not mine."²⁴⁾

Volumnia のセリフとスパルタの婦人のセリフとの大きな違いは Volumnia のセリフが仮定に基づいているのに対してスパルタの婦人のセリフは実際に息子を戦争で失った婦人の言葉であることである。あるスパルタの婦人は実際の息子の戦死報告に対して、生死よりも死に様を問題にし、また別の婦人は戦死した息子は自分の息子と認めるが臆病風に吹かれて生き延びた息子のことは勘当する。もし自分に12人の息子があったとするなら“*I had rather had eleven die nobly for their country than one voluptuously surfeit out of action*”(1. 3. 19-20)というのは2番目のスパルタの婦人の話に似ている。しかし、一般的に人間は仮定の話なら立派なことも言いやすい。過酷な現実を突きつけられた時にも同じ態度を貫き通せるかどうかは別問題である。実際、Volumnia の話と2番目のスパルタの婦人の話の間には些細に見えるが無視することのできない違いが存在していることがわかる。なるほど2番目のスパルタの婦人の息子も生き延びる者と戦死する者に分れる。しかし2人ともが戦争に赴く。つまり、2人とも死ぬ可能性もあったということには相違ない。それに対して Volumnia の話に出てくる生き延びる息子は“*one voluptuously surfeit out of action*”である。Volumnia は人から後ろ指を指されるようなヤクザな息子と名誉の戦死を遂げる息子を比較することはできても「他の兄弟と同様に勇ましく戦場に赴いたが土壇場で怖じ気をなして生き延びた息子」と名誉の戦死を遂げた息子の比較はできないのである。Volumnia の煮え切らなさは最初のスパルタの婦人の態度と比較するときにより鮮明

に浮かび上がらされる。Volumnia は決して「自分に12人の息子がいるとすると、戦にも出ない息子が一人でも生まれるよりも12人全員がお国のために立派に死んでくれることの方を望みます」とは言わない。「11+1=12」という計算にごまかされて観客はともすれば Volumnia は息子が死んでも平気なのだと思いますが、仮定の話の中でも Volumnia は生き延びる息子を一人残しているのである。そして実際の Volumnia には初めから子供は一人しかいない。このことは Volumnia が口先でどんなに名誉を重んじ、それどころか意識の上ではお国のためには喜んで息子の命までも捧げようと努力をしたところで、意識の下にはたとえ人から後ろ指を指される様なヤクザな存在になっても生き延びて欲しいという気持ちが横たわっていることを示唆していないだろうか。

お国のためなら息子の命を喜んで差し出すという Volumnia の決意が現実に裏打ちされたものでないことは、Coriolanus 追放の場面で明白になる。執政官になって欲しいという母の願いもむなしく、それどころか選挙活動期間の Coriolanus の民衆を見下した態度と Coriolanus を破滅させようとする護民官の扇動の相互作用により Coriolanus に追放が宣告され息子がそれを受けた後の Volumnia の姿には、名誉のためなら息子の命を捧げることも厭わないと言っていた女丈夫の面影はどこにもない。追放の宣告が下され、Coriolanus がそれを受けた以上、泣いても、わめいても無駄で今後の方針を決め、Coriolanus が落ち着ける場所を考え出し、呼び戻す好機の到来を逃さないようにすることが大事であるが、その好機を作り出す最適の方法は、Coriolanus を民衆の敵と見なし Coriolanus 追放で沸き返っている民衆の興奮を冷まし、町に為した Coriolanus の貢献を思い出させることにより彼に対する民衆の懐かしさを募らせることである。恐らくそのための最善の方法は、開幕場面で暴動を起こした市民にユーモラスな語り口で胃袋のたとえ話をして民衆の興奮を静めたときの Menenius のように、興奮している相手に逆らわず、かといって言いなりになることもなく、のらりくらりとユーモラスに対話を続けることによって意志疎通を図ることであろう。息子が追放の宣告を受ける前の Volumnia は「甘言で敵の城を陥れる」時のように、家族や元老員や貴族の安全を守るためには、本性を偽り民衆に甘い顔をして彼らの好意を手に入れる必要性を理解していたし、息子に説教しさえした(3.2.60-65)。しかし本当に Volumnia がそのような態度を取ることを求められているときには Volumnia の説教は彼女自身に何の役にも立たないのである。Volumnia が追放の宣告を受けた息子を慰め励ますのではなく、息子に慰め励まされるのである。Coriolanus の追放を悲しむのは Volumnia だけでなく、妻も同様である。しかし Volumnia の悲しみのほうがより深いことは Coriolanus が専ら母を慰めようとすることによって示唆されている："leave your tears"(4.1.1); "Where is your ancient courage?"(4.1.3) そして Volumnia の怒りが常軌を逸したものであることは、Volumnia と Virgilia と Menenius の3人組に出食わしたときに Brutus が Volumnia のことを "They say she's mad"(4.2.10) と言うことによって裏付けられ、護民官に激しく毒づく Volumnia にあきれ返る Menenius の間投詞によって強化される："Fie, fie, fie."(4.2.56)。ここでの Volumnia の激しい悲しみは彼女の野心が挫折させられた故でないことは、息子を戦場へ送り出したときの気丈と対照的に追放の宣告を受けた息子の安否に心を砕くことからわかる："My first

son, / Whither will thou go?"(4. 1. 34) "[Blood] more becomes the man"(1. 3. 34)と思うだけでなく"O, he is wounded; I thank the gods for't"(2. 1. 99)と言い、息子が受けた傷を数え上げたときの Volumnia と息子が追放の宣告を受けた後の Volumnia の像の齟齬をどう解決したらよいのだろうか。

なるほど12人の息子の仮定に基づく話と異なり「傷を負っている」というのは現実のことである。傷故に感謝の祈りを捧げるという言葉が息子の体を気遣う母の悲しみを隠した言葉でないことは Coriolanus が受けた傷を Menenius と誇らしげに数え上げることによって示唆されている。"Here will be large cicatrices to show the people when he shall stand for his place"(2. 1. 123-24)という言葉は、息子を自分の野心を満たすための道具としか見なしていないことを示唆していることは先述した通りであり、この場面での Volumnia が「我が子を食い殺す畜生の母」以外の何者でもないことは否定できない。しかしこのことを認めた上で忘れてはならないことがある。Volumnia が息子の傷を民衆に見せて執政官になるのに必要な票を獲得する道具と見なしていることは、息子の体が執政官になるのにふさわしい状態を維持していることを前提条件としていることを意味する。換言するならば、傷を見せて息子が Rome に対して為した貢献を民衆に訴えかけるためには傷が多い方が有利であるから多数の傷を歓迎することはできるが致命傷になりうる深手を負うことは初めから想定していないことである。Coriolanus の受けた傷はその1つ1つが"an enemy's grave"(2. 1. 129 強調筆者)だから神に感謝の祈りを捧げられるのであってその傷の1つでも息子の死はもとより、深手になるときは話は別なのである。意識下では中程度の傷——1幕9場で Coriolanus は片腕を布で吊って登場する——までしか想定しておらず、従って覚悟ができていながらもその程度の傷までなので、息子が本当に深手を負う——追放を宣告される——のに直面したときには息子を叱咤激励するときには口にしていた教訓は何の突っ張りにもならず、完全に平静心を失うのである。観客は息子の追放宣告に直面したときの Volumnia の取り乱し様から Coriolanus に対する気丈な態度の背後には息子に対する偏愛とも言えるほど深い愛情が潜在していたことに気づかされる。この愛情が Coriolanus の中で抑圧されていた nature の叫びに通じ、5幕で自分が破滅することを予感しながら Volumnia の懇願に屈することにつながることを推察できる。しかしこれで問題が解決したわけではなく、この後に最大の難関が残っている。Volumnia が本当は「我が子を食い殺す畜生の母」でなく、気丈さの背後に深い愛情が存在しているというなら、この劇の終わりで何故我が子を犠牲にする懇願ができるのかという問いである。次項ではこの問題を検討したい。

IV

復讐の鬼と化した Coriolanus に慈悲を乞いに行くのは, Cominius, Menenius, 家族²⁵⁾ 順番であるが、この順番は恣意的なものではない。Coriolanus と親しく、彼の心を和らげることができるかもしれない人たちの中では Coriolanus との関係が遠い人から懇願に行っている。Cominius は彼が敬愛していたかつての指揮官であった。それに対して Menenius は Coriolanus が「父」と呼んでいた人物である。この親密さの程度の違いは

Coriolanus に与える影響力の違いに反映されている。Cominius が訪問したときには一度だけ名前を呼んでくれたが"Coriolanus"という呼びかけにも答えようとはせず、友情をかき立てようとしても "T was folly/ For one poor grain or two to leave unburnt/ And still to nose th' offence"(5. 1. 26-28)という答えを得るだけである。Menenius の嘆願も不調に終わる。しかし Coriolanus は二人が"familiar"(5. 2. 79)だったことを認め、かつての友情の印として手紙を手渡している。その手紙は Rome がとうてい受け入れられない内容が書かれたものに過ぎないが「実の父親以上に俺をかわいがってくれた("loved me above the measure of a father"(5. 3. 10.))」人物を追い返すのは胸のつぶれる思いがするので気持ちだけでも彼の恩に報うことをしたいという思いを押さえきれなかったからである。「胸のつぶれる思い」で Menenius を追い返し"Fresh embassies and suits,/ Nor from the state nor private friends, hereafter/ Will I lend ear to"(5. 3. 17-19)と断言した直後に家族が打ちそろって嘆願に訪れ Coriolanus は結局、家族、特に母の嘆願に屈する。

上の段落で嘆願に訪れるのは Coriolanus と近い関係にある人たちがその中では関係が遠い人から先に訪れて最後に家族が嘆願に来ると述べた。ここで注意しなくてはならないことは、家族は打ちそろって訪れるが、横一列になって来るのではなく、家族の中にも順番が存在することである。観客は舞台に登場する家族の姿を見ることによって家族の間にも順番が存在することを視覚に訴えかけられるだけではなく Coriolanus のセリフによっても注意を喚起させられる："My wife comes foremost, then the honoured mold/ Wherein this trunk was framed, and in her hand/ The grandchild to her blood"(5. 3. 22-24)そして Coriolanus に語りかけるのも Virgilia が先であることは先述したとおりである。頑なな心を動かすことができるのはより近い存在であることは自明なことなのに何故遠い方から懇願に行くのか。家族の中では何故妻が先で母が後なのか。この問の答えの鍵になるのは誰が Coriolanus に哀れみを乞いに行くかを護民官と Cominius と Menenius の間で押し問答しているときの Cominius と Menenius の言葉だろう。護民官や民衆は Coriolanus を追放した当事者だから彼らが嘆願に行く資格がないのは当然として Cominius は嘆願に行きたくない理由として次のように言う："For his best friends, if they/ Should say 'Be good to Rome,' they charged him even/ As those should do that had deserved his hate/ And therein showed like enemies."(4. 6. 116-19)他方 Menenius は次のように述べる："If he were putting to my house the brand/ That should consume it, I have not the face/ To say 'Beseech you, cease.'"(4. 6. 120-22)Rome の敵になってもなお友情を感じていることは2人に共通しているが、彼らが挙げる嘆願に行きたくない理由の違いに彼らの抱いている友情の程度の差が反映されている。つまり、Coriolanus に敵と見なされたくないから嘆願に行きたくないという Cominius の理由は Coriolanus よりも自分の立場を重んじることを示唆しているのに対して、「やめてくれ」と頼む厚かましきはないという Menenius の理由はより Coriolanus の心情に加担していることを示唆する。そして Coriolanus に対する家族の思いと Cominius や Menenius の思いの間には程度よりも質的な差が存在する。Menenius は Cominius より Coriolanus に加担しているとはいうものの、Rome と Coriolanus の選択で悩むことはない。「やめてくれ」と頼む厚かましきは

なくても *Coriolanus* が自発的にやめてくれればよいと思うのは当然である。それに対して家族の思いはそんなに簡単に割り切れるものではない。自分たちもその一部であるところの *Rome* のために祈る一方で *Coriolanus* の勝利をも祈らずにいられない。どちらが勝っても彼女たちを待ち受けるのは大いなる不幸でしかない。何故ならそれは祖国か「夫や息子や父」のいずれかを失うことを意味するからである。母の嘆願に屈するとき *Coriolanus* が予感したように *Coriolanus* に *Rome* に対する慈悲を求めることは *Coriolanus* を破滅させることである。*Rome* のために祈る一方で *Coriolanus* の勝利をも祈らずにはいられない家族にとって *Coriolanus* を切り捨てる決心は身を引き裂かれる思いがするものであるが故に嘆願に行く決心に手間取るのであろう。

次に *Virgilia* と *Volumnia* の順番についてであるが、*Hofling* が指摘するように *Coriolanus* の出征中は夫の無事を祈って敷居をまたがないという決意を貫き通したり、執政官に仕立て上げるために画策をしないことから判断すれば、*Coriolanus* に対する純粋な愛情を抱いているのは *Virgilia* の方に見える²⁶⁾。しかし既に見てきたように *Coriolanus* に追放宣言が下された後での2人の苦しみ方の質の相違から判断すれば *Coriolanus* に対する本当の愛情を抱いているのは *Volumnia* だと判断しなくてはならない。*Volumnia* は確かに名誉を重んじる。しかし *Virgilia* が夫の死を想像しうるのに対して——“Had he died in the business?” (1. 3. 15)——*Volumnia* には息子の死など想像もできないのである。既に議論したように、たとえ仮定の話の中でも息子の死には直面したくないほどの愛情を抱いていたが故に、その息子を破滅させる引き金を引く懇願に行く決心をつけるのは、夫が戦死しうる可能性もある覚悟をつけてきた *Virgilia* よりはるかに辛いことなのである。だから2幕1場で無事帰還した *Coriolanus* を迎えに行くときには嫁を従えわき目もふらず出迎えに行き *Virgilia* に先立ち息子と挨拶を交わした後で息子の注意を嫁に向けるのに対して、息子を犠牲にする懇願に出向くときには嫁の後に従っていくのである。

厳しさの背後にそれほどの愛情が隠されているなら不承不承といっても *Rome* と我が子の選択で *Rome* を選ぶだろうか。*Volumnia* は *Coriolanus* に嘆願するとき *Rome* を攻撃することは母のおなかを踏みじることだ(5. 3. 124)と言うが「母のおなか」は *Coriolanus* との近さを強調する言葉ではあっても *Coriolanus* の側からすればそれはあくまで自分の出自であり自分そのものではない。それなのに近さを強調する言葉を用いて *Coriolanus* を惑わし、自分よりも母を選ばせようとすることは、どんなきれいな事と言っても結局 *Volumnia* は「我が子を食い殺す畜生の母」でないかという反論があるかもしれない。この問題に答えるためにもう一度家族間の順番を考えてみよう。

Coriolanus の家族は打ちそろって嘆願に行くが横一列になって行くのではなく *Virgilia* が先頭に立ち、その後ろに *Volumnia* が孫の手を引いて従っていると述べた。そして妻と母の順番の意義については既に議論したとおりであるが、この順番でもう一つ大事なことは、*Coriolanus* の子供である *Young Martius* が母の *Virgilia* でなく祖母の *Volumnia* に手を引かれて登場することである。しかも嘆願の場面で *Young Martius* に言及する言葉は *Volumnia* によって語られる方が圧倒的に多い。より重要なことは数の多さよりも父と子の結びつきに言及する言葉が *Volumnia* によって語られていることである：“This is a poor

epitome of yours,/ Which by th' interpretation of full time/ May show like all yourself."(5. 3. 68-70); "his child/ Like him by chance"(5. 3. 179-80)なるほど"[my womb] /That brought you forth this boy to keep your name /Living to time."(5. 3. 125-27)という Virgilia の言葉も Coriolanus の息子の Young Martius に言及する言葉であることは確かだが、皮肉なことにも母と子の肉体的な結びつきを強調することによって父と子の結びつきをそれだけ遠いものを感じさせている。それに対して Volumnia は Coriolanus に Young Martius が"a poor epitome of yours,/ Which by th' interpretation of full time/ May show like all yourself."と言うことによって「祖国を攻撃することは母のおなか」つまり Coriolanus の過去を踏みにじるだけでなく、「時が来れば今のおまえそっくりになる存在」つまり Coriolanus の未来をも自ら抹殺しようとすることになるんだよ、それでもお前は Rome を攻撃するつもりなのかと問いただしているのである。自分の分身(将来)をも抹殺することになるという母の言葉で自分がやろうとしている行為のおぞましさを悟らされた Coriolanus は、Rome 攻撃をやめて自ら破滅する道を選ぶが、Rome か息子かという究極の選択を突きつけられた Volumnia が息子を犠牲にすることを選択するのも、まさにそういう理由からではないか。息子を選んでも息子が祖国を破壊し、孫を殺せば息子の未来は孫の死と共に終焉を迎える。しかし、祖国を選べば息子本人は死んでも孫の中で息子が生き続けることができるから息子を犠牲にすることを選択したのではないだろうか。親子の類似をことさら強調するのは詭弁に過ぎず、息子の親としての愛情に訴えかけて息子を破滅させることにこそ Volumnia のおぞましき母としての真骨頂が発揮されているという反論があるかもしれない。なるほど Volumnia が「最善の目的のためとあらば、策略を用いて本来の自分でない姿」を見せることもよしとする人物であることは Coriolanus を推薦しながらすぐに取り消した民衆の心変わり毒づく息子をなだめすかして再度民衆の信任を得るべく努力するように促すときの Volumnia の言葉が証明している。Mckenzie²⁷⁾ や Leggatt²⁸⁾らが指摘するように、ことさら親子の類似を強調することは、自分なら目的のために策略を用いて本来の自分でない姿を見せると言った Volumnia の言葉を実行に移したものと見えるかもしれない。しかし Shakespeare は Young Martius の中に幼き日の Coriolanus の姿を見る Volumnia の態度が観客にとってつけたものに見えないように1幕3場でお産の床についている婦人のお見舞いに行こうと誘いに来た Valeria に "How does your little son?" (1. 3. 47-8)という質問を挨拶の形でさりげなくさせることによって用意している:

Virgilia: I thank your ladyship; well, good madam.

Volumnia: He had rather see the swords and hear a drum than look upon his schoolmaster.

Valeria: O'my word, the father's son! I'll swear 'tis a very pretty boy. O'my troth, I looked upon him o'Wednesday half an hour together. 'Has such a confirmed countenance! I saw him run after a gilded butterfly, and when he caught it, he let it go again, and after it again, and over and over he

comes, and up again, caught it again. Or whether his fall enraged him, or how 'twas, he did so set his teeth and tear it. O, I warrant how he mammocked it!

Volumnia: One On's father's moods.

Valeria: Indeed, la, 'tis a noble child.

Virgilia: A crack, madam. (1. 3. 49-61)

Virgilia が自分の子供を気にかけてくれる Valeria に感謝し、子供の性格を母親らしい気遣いで心配しているのに対して Volumnia は孫が父親に似ていることを喜び、誇りに思っている。ここでの3人の婦人たちの会話はなくても筋の進行に支障を来さない。とすれば、この会話は筋の進行とは別の目的のために用意されているのではないか。そしてこの地点ではまだ *Coriolanus* の前途は洋々としているので、ここで Volumnia が孫と父親の類似性を強調することは彼女にとって何か実際的な役に立つわけではない。むしろこの会話は、残忍無情な母親としての Volumnia 像とはかけ離れた、孫の中に息子が息づいているのを喜ぶ祖母としての自然の感情の発露を観客に伝えることを目的としているのではないか。ここで Volumnia の意外な横顔が呈示されているから嘆願の場面で *Coriolanus* と Young Martius の類似性を強調する Volumnia の言葉が自然に聞こえるのではないか。孫の中に息子が生きていてことを実感しているからこそ Rome か息子かという究極の選択を突きつけられたときに息子を犠牲にすることを選択することができるのではないか。そして *Coriolanus* と Young Martius の類似性を強調する Volumnia の言葉が彼女の本心から出た真実の言葉だと感じられるからこそ、*Coriolanus* は自分の破滅を予感しながらも Volumnia の嘆願を受け入れるのではないか。

結び

我が子を平気で犠牲にする“repulsive mother”としての Volumnia 像には異論もあるが、Volumnia の中に残忍無情な母の姿だけを見出す解釈は依然として主流をなしている。この Volumnia 観は *Coriolanus* を次のように解釈する。すなはち、母親の愛情の欠如と名誉欲が *Coriolanus* を尊大な人物に育て上げ、民衆と対立させた。傲慢さ故に追放を宣告されたときに *Coriolanus* は“I banish you”(3. 3. 131)と啖呵を切って Rome を後にし、かつての宿敵 Aufidius を訪問して彼と組んで Rome を攻撃するが、Rome は母を表すので Rome 攻撃は母に対する攻撃であり、母からの分離、独立のための息子の葛藤を表していると考えられてきた。そして *Coriolanus* が母の嘆願に屈するのは命令者であった母が跪いて嘆願することによって母子の立場が逆転し、もはや *Coriolanus* にとって母たる Rome を攻撃しなくてはならない理由がなくなり母子の和解が成立したからだと考えられてきた。しかし Volumnia の嘆願を受け入れることは自分が破滅することだと *Coriolanus* は自覚している。自己の破滅を条件とした和解は不自然である。むしろ *Coriolanus* が母の嘆願を受け入れるのは、Volumnia に潜在する愛が *Coriolanus* の nature を呼び起こし、*Coriolanus* に彼の行為のおぞましさを自覚させるからだと言えよう。Volumnia は

"repulsive mother"像が前面に出ているが、決して平気で「息子より名誉」を選ぶ愛情の欠如した人物ではないのである。

注

- 1) *Coriolanus*, ed. Lee Bliss (Cambridge: Cambridge UP, 2000)1 幕 6 場 33 行. 以下, *Coriolanus* からの引用はすべてこの Cambridge 版により本文に幕, 場, 行を記す.
- 2) Lee Bliss, introduction, *Coriolanus* by William Shakespeare, (Cambridge: Cambridge UP, 2000) 48.
- 3) Janet Adelman, "'Anger's My Meat': Feeding, Dependency, and Aggression in *Coriolanus*," *Representing Shakespeare: New Psychoanalytic Essays*, ed. Murry M. Schwartz and Coppelia Kahn(London: Johns Hopkins UP, 1980) 140.
- 4) Charles Hofling, "An Interpretation of Shakespeare's *Coriolanus*," *American Imago* 14 (1957): 415.
- 5) Rufus Putney, "Coriolanus and his Mother," *Psychoanalytic Quarterly* 31(1962): 377.
- 6) D. W. Harding, "Women's Fantasy of Manhood: A Shakespearean Theme," *Shakespeare Quarterly* 20 (1969): 253.
- 7) Harold Bloom, introduction, *William Shakespeare's Coriolanus* (New York: Chelsea House, 1988) 4.
- 8) Christina Luckyj, "Volumnia's Silence," *Studies in English Literature, 1500-1900* 31 (1991): 338-39.
- 9) G. R. Hibbard, introduction, *Coriolanus*, by William Shakespeare (London: Penguin Books, 1967) 45.
- 10) R. B. Parker, introduction, *The Tragedy of Coriolanus* by William Shakespeare (Oxford: Oxford UP, 1994) 53.
- 11) Parker, 32.
- 12) Madelon Sprengnether, "Annihilating Intimacy in *Coriolanus*," *Coriolanus: Critical Essays*, ed. David Wheeler (New York: Garland, 1995) 179-202.
- 13) Coppelia Kahn, *Man's Estate: Masculine Identity in Shakespeare* (Berkeley: U of California P, 1981) 151-92.
- 14) Coppelia Kahn, *Roman Shakespeare: Warriors, Wounds, and Women* (London: Routledge, 1997) 157.
- 15) Hofling, 427.
- 16) John Middleton Murry, "*Coriolanus*," *Twentieth Century Interpretations of Coriolanus* (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1970)157.
- 17) Marilyn L. Williamson, "Violence and Gender Ideology in *Coriolanus* and *Macbeth*," *Shakespeare Left and Right* ed. Ivo Kamps (New York: Routledge) 158.
- 18) Alexander Leggatt, *Shakespeare's Political Drama* (London: Routledge, 1988) 208.
- 19) Parker, 23.
- 20) "tender" A adj.II. 4, *OED*, 1989 ed.
- 21) "tender" A adj.I.1. a, *OED*.
- 22) Kahn, *Roman Shakespeare*, 146.
- 23) *Plutarch's Moralia*, trans. Frank Cole Babbitt 15 vols.(Cambridge: Harvard UP, 1931) 3:461-63.
- 24) Babbitt, 465-67.
- 25) Anne Barton は, *Coriolanus* を説得に行くのは家族だけでなく Valeria も同行する, そしてこのことは勝利が家族に帰するのではなく, Rome に帰することを意味していると主張している。

Anne Barton, "Livy, Machiavelli, and Shakespeare's 'Coriolanus,'" *Shakespeare*

Survey 38 (1985): 127

しかし、5幕3場23-24行で家族間の順番に言及する *Coriolanus* のセリフの中に *Valeria* が出てこないことや、嘆願の場面で *Valeria* が一言も発しないこと、さらには家族の者たちも *Valeria* に言及しないことから判断すれば、この場面での *Valeria* は余剰な存在に過ぎないと言えよう。

²⁶⁾ Hofling, 418-19.

²⁷⁾ Stanley D. McKenzie, " 'Unshout the noise that banish'd Martius': Structural Paradox and Dissembling in *Coriolanus*," *Shakespeare Studies* 18(1986):199.

²⁸⁾ Leggatt, 20.